

# 徽音祭共同研究

## 中川流域の低湿地

昭和34年11月

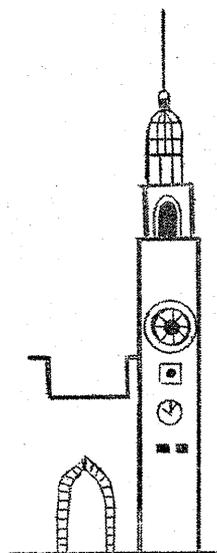
上野駅から常盤線で約20分、有名な千住のお化け運突などに気をとられているうちに、中川にさしかかる。小さい川ではあるが、注意深い人ならこの川がほとんど天井川の状態を呈しているのに気がつくであろう。私たちは、この中川流域に発達する低湿地帯について調べてみることにした。

はじめに、岩槻市にある中川水系工事事務所を訪ね、備えつけたばかりのトヨパットマスターラインで地域内を案内してもらった。栗橋鉄橋附近の低地から利根川砂土、安行の貝塚、輪中、堀上田など興味深いところが多く、川口駅で別れた時はすでに夕刻近かった。

中川水系といつても地域が広すぎるので、この日の見聞なども参考にして、特に蕪美を二郷半領地域に置くことにした。ここは東西を江戸川と中川に挟まれた南北に細長い紡錘形の地域で、江戸川を挟んで対岸には、味淋で有名な流山の町を控えている。二郷半とは、吉川・彦成の二郷と彦成以朝の半郷を合わせたもので、郡の起因は、大化改新の際に50戸をノ里とし、715年に条里の里と区別してこれを郷とつけたことにある。

調査にあたっては、地形、土壌を中心とするオー班と、農業に重きを置くオニ班とに分かれ、自然、人文の両分野からの考察を試みた。

ただし、地形は、二郷半領地域については空中写真による分類程度にとどめ、大きな観測から、中川流域全般、さらには荒川、利根川流域にも及ぶ広大な範囲をとり上げた。中川水系工事事務所の資料により作製したこれらの地域の「5万分の1、自然堤防、後背湿地、台地分布図」は、日本地誌Ⅰの資料として、現在なお松井先生の研究室に保管されている筈である。オー班は、これらの資料や地形発達史の解説の他に、外部からの参観者のために低湿地の成因解説などを合せ、最後に二郷半領地域の地形調査の結果を置いて、この地域の全体の中での位置づけを試みた。また、この地形調査と平行に、ボーリングステッキによる水田土壌調査も行い、それらのサンプルなども展示した。これらの現地調査は、午論への心がまへの基礎となり得たと思う。



カニ班は、低湿な地形条件の下における用排水施設の進捗と、それに伴う土地利用の変遷に亘るを置いた。

調査の内容について簡単にふれると次のとおりである。中川流域は、昔の利根川や荒川などの河川が乱流していたと考えられる平坦な地域で、大台地等とはじめとする洪積期台地の形成と、侵蝕谷の形成後、相対的に陸地が低下して、貝塚の分布から推定すると現在の標高約10mの所まで海が入り、その後、広い沖積地が形成されたものである。沖積地は自然堤防と後背湿地よりなり、又、台地間に発達する支谷も、利根川、荒川本流よりの融入堆積作用の影響で湿地を形成する。このため中川流域にはいわゆる低湿地が広く分布する。

二郷半領地域も、かつては二郷半沼と呼ばれる大きな沼沢地であったと考えられる。したがって、現在も地形は、低平ながらも周囲が高く中央部が低く、ボーリングによると、沼沢堆積の泥炭が各所に見られる。泥炭質の土壌のところは、水田の漏水量が多く用水が不足しがちであるが、一般に土地が低平なため排水が悪く、深田のために農作業が困難なほどで、漏水不足と排水困難という一見矛盾する現象が共にみられる。

したがって今後の改良計画には、排水に備えて、暗渠排水路やポンプの設置、用水に対しては、用水ポンプの設置などが考えられるが、根本的に耕地整理をして、用排水の良りを改良することも考えられ、現在一部実施されている。

土地利用は、二郷半領4000haの中、水田面積が3000haにも及び、以前は水害を避けるため早稲米の生産が行われていたが、排水改良の結果、現在では、中生、晩生種になり、反当収量も増加している。戦前は殆ど一毛作のみであったが、排水改良とともに戦時中の麦の強制作付で二毛作が行われるようになった。麦の強制徹底以来、特に東京に近い下流部では蔬菜栽培への転換が顕著である。堤防をいにかかぬ乳牛も飼われている。野田を控えて副業としてのワラ工（むしろ、なわ、こも）製造が盛んだが、現在は減少の傾向にある。芳切力には排水不良の深田のため、牛馬による深耕が殆ど行われてこなかった。最近では東京への芳切人口流出が多く、芳切力不足の傾向が強いため、牛馬はいよいよ減少し、排水改良のできた田には耕植機の導入が著しい。肥料は下肥一辺倒から配合肥料へと変わりつつある。

以上、二郷半領という沖積平野の一小地域の農業に対する自然の制約、それに対する人間の土地改良事業を中心とし、その変遷する姿を、不十分なながらも捉えたつもりである。